

「小さな人権」

福島県 須賀川市立第二中学校 1年

須田 日菜子（すだ ひなこ）

私には、心に決めていることがあります。それは、どんなに小さな子供でも、大人と同じ条件で何かしようとしている時は大人と同じように扱おう、というものです。それは、私が小さなとき、あるスーパーで教えてもらったことです。

私が五歳の頃の話です。

母が不在のある日、父に連れられて幼い私と二人の妹はスーパーに買い物へ出かけました。買い物を終えたその時、母から頼まれていたティッシュペーパーボックスを買い忘れたことに父は気づきました。ところが、折悪く、小さな妹がトイレに行きたいとぐずり始めたのです。

「日菜子、お父さんの代わりにティッシュボックスを買ってくることはできるかい。」

困った父は私を頼るように言いました。

「大丈夫だよ。だからトイレに連れて行ってあげて。」

と答えた私でしたが、実際は一人でスーパーのレジに並んで会計をするなんて初めてでした。商品を見つけ、預かった五百円玉を握りしめてレジに行くと、長蛇の列です。仕方なく、並んで待つことにします。私の前に並んでいるのは、たくさんの商品が入ったカゴを持った中年の女性。後ろはちょっと怖そうな外見の男性です。大人ばかりの列に入ると、五歳の私はとても小さくて、不安気に見えたそうです。私は私で、トイレから戻ってきた父と妹たちがレジから少し離れたところで私を見守っているのを見つけ、少し嬉しくなって手を振ったのを覚えています。

しばらく待って、私の前にいた女性の会計が終わり、私はよしよ、とボックスを抱え直し、一步前に出ようとしていました。すると、私の後ろの男性が自分のカゴをポンとレジ台におき、

「あと、たばこ一つ。」

とレジの人に声をかけたのです。私は慌てて自分の番だと主張しようと、あの、と言いました。しかし、レジの人はそのままその男性の会計をしようとしています。私が小さくて見えなかったのかもしれませんが、前後のどちらかの大人の人と一緒に思い込んだのかもしれませんが。どちらにせよ、レジは混んでいて、周りの人たちも私のことなど気にも留めていない様子でした。私はもう一度、あの、と声を出しました。ようやく、私の存在に気づいたらしいレジの人は、

「ほらそこにいると危ないよ，早くお母さんのところに行ってね。」

と言うのです。為す術もなく周りを見回し，それから遠くにいる父に目で助けを求めようとしました。しかし，父も何が起きているのか気づいていないようなのです。このままでは私の順番は永遠に飛ばされてしまう。なんだか悔しくなつて，本当に泣きそうになったその時，

「お客様の順番を間違えています。」

というはっきりとした言葉が聞こえました。そのお店の名が入ったネームプレートをつけた年配の方でした。続けてその人は，私の後ろの男の人に向かって，

「すみません，お待たせして申し訳ありませんが，こちらのお客様を先にさせていただきます。よろしいでしょうか。」

ときっちりと言ってくれました。

男の人は，あ，ああ，すみません，どうぞどうぞ，と少しきまり悪そうに言いました。どうやらマネージャーさんらしきその人は，次に，私に掌を向けながらレジの人に

「こちらのお客様に謝罪しなさい。」

と，静かに告げました。そして，五歳の私に

「失礼な対応をして，誠に申し訳ございませんでした。」

と自ら深々と頭を下げてくれたのです。

幼かった私には，その時何が起っていたのか本当に理解していたとは言えません。ただ，周りの，レジに並んでいた人たちが大きな拍手をしていたことはしっかりと記憶に残っています。

あの時，あのマネージャーさんは，五歳の私のことを，年齢や性別に関係なく，一人のお客，一人の人間として扱ってくれたのだと思います。考えると，店のお客さんの前で従業員を叱る，というのは普通，避けたいことに違いありません。でも，それよりも，私の人権を大切にしてくれた。そのことを，私は今も事あるごとに思い出しています。

子供だから，その存在に気づかなくても仕方ないだろう。子供だから，こちらのミスもごまかせるだろう。子供だから，こちらが謝らなくても言いくるめますことができるだろう。

それは全て間違いだと思います。

五歳のある日，私がああのマネージャーさんにどんなに救われたか，その日のことがどんなに心に刻まれたか。

私は小さな子供たちの尊厳と権利の守れる大人になりたい，と思っています。